



山口県立下関北高等学校
山口県立響高等学校
山口県立豊北高等学校

学校通信“NEWSchool”では、4月に開校する下関北高校のコンセプトや高校入試の方法、2つのコースの学習内容、特色ある学校行事をはじめ、新制服、部活動や先行して実施している様々な取組を随時紹介してきました。今回は、充実した進路指導体制について紹介します。

学習習慣の定着

○毎朝SHRの前の10分間の学習

学習習慣を身に付け、基礎基本を確実に習得するため、国(全学年共通の漢字テスト)、数(計算など基礎・基本問題の徹底学習)、英(英単語テスト)、新聞コラムの書写を実施しています。

○キャリア支援室・自習室 放課後自学自習できる環境を整備しています。



進路意識の向上

体験型の進路学習を計画的に実施しています。

○職業理解ガイダンス(1,2年:6月) 大学や専門学校の講師によるIT・医療看護・観光・公務員・福祉・スポーツなど13の講座を開講しています。

○ホームカミングガイダンス(1,2年:9月) 山口大や下関市立大、梅光学院大学など17名の卒業生等が講師として上級学校等について紹介しました。



○大学・専門学校見学(1,2年:10月)

1年生は山口大学と山口県立大学、2年生は2グループに分かれ、九州医療スポーツ専門学校、九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学、下関市立大学、梅光学院大学を訪問しました。

○進路ガイダンス(1,2年:11月) 近隣の大学・短大・専門学校計13校によるガイダンス

○3年生の進路体験に学べ!(1,2年:2月) 身近な先輩の努力にふれます。



実力の養成

きめ細かな指導で、進路実績は年々向上しています。

○早朝・放課後・夏季休業の課外学習(希望者)

早朝・夏季課外は1年から、放課後課外は3年で実施しています。

○予備校自習体験(3年大学進学希望者:6,9月)

北九州予備校の自習室で予備校生とおおよそ7時間自習します。

○面接指導ガイダンス(3年:6月)

公務員専門学校の講師から心構えやマナーについて学びます。

○夏休み校外学習会(3年大学進学希望者)

進路コーナー



進路コーナーには、未来へのチャンスがいっぱいです。未来をイメージできれば、今の過ごし方が変わってきます。

最大の特徴は、徹底した個別指導



一人ひとり受験方法にあわせて、個別にきめ細かい指導を行っています。特に、小論文や面接指導は、全教職員が分担して、マンツーマンで徹底的に行っています。

地域の宝“豊かな海”を体験

生憎の荒天のため、水上サイクリングなどのマリンスポーツ体験は、セグウェイ体験に変更になりましたが、ホテル西長門リゾート敷地内の、角島が間近に見える絶景スポットで、NPO法人 コバルトブルー下関ライフセービングクラブ・海耕舎さんが、地域の活性化のために実施しておられる豊かな海を活用した様々な取組を体験しました。

※ビーチクリーン&海藻を肥料とした有機農法体験 &セグウェイ体験
 今後は、SUP (Stand Up Paddle)などのマリンスポーツも体験させていただきます。



一足お先に..

-新高校つまみ食い-

「瓦そば」調理実習

地元の郷土料理に関心をもつことを通して、郷土愛を深めることを目的として実施しました。当日は、独身・単身の先生方も加わり、生徒と一緒に、一所懸命調理しました。

12月15日(金) 山口新聞

高校生と学ぶ “地域創生講演会”



下関市豊北町蒲部の豊北高校(竹村和之校長、141人)の2年生23人が14日、家庭科の授業で郷土料理「瓦そば」を調理した。生徒たちは同市豊浦町川棚の「瓦そば たかせ」の高瀬利也会長(59)らの指導で、麵を焼いたり、麵に添える鰯糸卵を作ったりして完成させた。田坂永吉さん(16)は「瓦そばは古里の味で家で食べる。卒業後県外に出ることがあれば県外の友人にも伝えたい」。豊浦ライオンスクラブの派遣生として調理に参加したマレーシア出身のナタリー・コタンさん(16)は「伝統的な料理はこれからも伝えていきたい」と話した。高瀬会長は、川棚温泉を活性化するためにを物料理を呼びたいという思いから瓦そばが誕生し、今では家庭料理としても定着した歴史を紹介。卒業後に県外へ出て紹介してほしい」と呼び掛けた。

「古里の味、伝えたい」 豊北高で「瓦そば」調理実習



瓦そば作りに取り組む生徒ら=14日、下関市

下関市豊北町の豊北高校(竹村和之校長)で「高校生と考える地域創生講演会」が12日、開かれた。日本総合研究所主席研究員の藻谷浩介さん(53)を招き、生徒や地域住民ら約200人が参加した。来年4月、豊北高校と豊北高校が統合して誕生する下関北高校は「地域と連携・協働する教育活動の推進」を掲げている。豊北高校ではその土台を作ろうと、豊北町に縁のある若手経営者との交流会を開くなど、地域と連携した取り組みを進めている。講演会では、生徒会の中野怡さん(17)が「人口の減少や流出と一口の減少や流出といった課題から目を離さず、地域のために何ができるかを考えよう」とあいさつ。生徒代表の2人は、産業界代表として「発表した2年生の福祉表を改めて気づいた豊北町の良さ」を、高校から発信していきたい」と話し、近くに住む未永登紀子さん(70)は「高校生が楽しく学校生活を送れるよう地道に活動していきたい」と続けた。

地域と連携 取り組み 来春統合の豊北高で講演会



町の課題や学校の取り組みについて発表する豊北高校の生徒ら

12月13日(水) 毎日新聞

メディアで大活躍の評論家である藻谷浩介さんをお招きした講演のテーマは、「ふるさとを守るために、今、私たちができること～今、日本で、山口県で、下関で起きていること。これから何が起ころ、私たちはどう生きればよいのか。～」です。

高齢者が急増している東京では、医療介護の体制整備が追いつかない状況である中、旧豊北町の高齢者数はほぼ横ばいであり、十分な医療・介護体制を整備しやすくなるとともに、減少する医療・介護に費やす費用を子育て環境の整備に回せば、子育て世代の若者を呼び込むことも可能となること。人生90年を野球に例えれば、高校時代はまだ2回の表にすぎず、退職する6回裏以降の9回裏までの間をどのようにして生きていくか、長い視点で考える必要があることなどを学びました。

自然や地域、人にふれる様々な経験を積み重ねる下関北高校の取組は、若者がふるさとに戻ってくることにつながる取組であり、6回裏以降の人生の過ごし方を考える取組であると、下関北高校に熱いエールを送ってくださりました。

を、高校から発信していきたい」と話し、近くに住む未永登紀子さん(70)は「高校生が楽しく学校生活を送れるよう地道に活動していきたい」と続けた。

【佐藤緑平】